

夫恋記

ふう

れん

き

十返千鶴子

夫恋記

ふう れん ぎ

十返千鶴子

新潮社版

夫恋記ふうれんき

一九八四年六月一五日 印刷
一九八四年六月二〇日 発行

著者 十返千鶴子とほえち せうこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—266—5111

（編集部） 03—266—5411

振替東京四一八〇八

印刷 株式会社光邦

製本 大口製本株式会社

定価 一〇五〇円



©Chizuko Togaeri, 1984
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

夫恋記*目次

滝野川のあの風呂屋 7

西ヶ原の坂道 14

幻しの古い家 21

記憶ちがいかな 28

煤けた疑惑 35

遠雷 42

遺稿 49

お酒はいつから 56

おくて酒 63

酒と毒舌 70

ハモニカ横丁 77

亭主の家出 84

恋文 91

古い手紙 98

京の夢 105

最良の日 112

浮気の始末 119

亭主とマイホーム 126

モダン住宅とドテラ 133

醜態もあり感激もあり 140

虚像か実像か 147

あの時、やっぱり…… 154

亭主の留守に 161

「淑女」の正月 168

奥多摩慕情 175

永遠の四十九歳 182

カブキ観賞 189

早すぎたフル・ムーン 196

鯛めし・麻雀・ゆいごん 203

浮名儲け? 210

二輪馬車は落ちた 217

*

あとがき 225

夫
恋
記

滝野川のあの風呂屋

ある日、何気なくつけたテレビの画面に、社会党前委員長の成田知己さんの葬儀の様子が写し出されていた。

ああ、今日だったのか――。

数日前、この人の死が報じられたとき、高名な政治家としての名前だけは知っていたとはいえ、逢ったことはたった一度、ほんの四、五分の立ち話を交したに過ぎない人だったにもかかわらず、悼む心は胸のうちに深くひろがった。そしてテレビに写る葬儀の模様をみながら、私も、花の輪でも供えてきたかった、などと思ってみたりする。

なぜだろう。成田さんという方は、政治家としては嫌いなタイプではなかったとはいえ、わざわざ葬儀に参列するほどの親しいおつきあいがあったわけではないのに、葬儀の日も知らずに過してしまったりしたことに、淡いながらも後悔の気持を持ったりするのは。

それはよくあるような、有名人の死とか葬儀などにむける庶民的な関心とか、またはその関心に連なる一種の感傷ではないかしらと考えるもみたのだが、どうやらそれとは少し違うようだった。では、成田さんの、意外に早いと思われる逝去に対する、ごく当り前な哀悼の念だったのかしらといえ、どうもそれだけでもないらしい。もしそれだけだったとしたら、せめて私も一輪の花を、などという殊勝な気持を起したりはしなかったと思う。成田さんの死は、そのいづれとも違つて、何かこう、私の古いアルバムの中から、糊のはがれた一枚の写真がこぼれ落ちて、は

らりと風にとばされてしまったような、そんな儚なさを感じさせるものだったのだ。

そうしてその儚なさを辿ってゆけば、いつの間にかそれが、成田さんにかこつけて、自分の死んだ亭主への追憶につながっているのだと気づいたとき、にわかに後めたさが身辺に漂ってくるのを感じないではいられなかった。ああ、いけない、いけない。成田さんへの献花などと誤魔化しても、詮じつめれば自分の亭主への献花になってしまうかもしれない。もう十数年も経っているというのに、なんというだらしないさ。もういいかげんにしたらどうなのさ、という気持が、それまでのやや感傷めいた曖昧な追悼に、はつきりと分別を持たせてくれたようだった。

それにしても私が成田さんに初めて逢い、それが最後となった日の、僅か四、五分の立ち話は、私の古いアルバムの中に、成田さんと十返との実在はしない一枚の写真を貼りつけるためには充分なほど、鮮やかな印象を残すものであった。

「ぼくはねえ、ござんじかも知れませんが、あなたのご主人と同じ中学でしてね、高松の……」

政治家らしくない、といえるくぐもった声でそう話しかけてこられた成田さんは、たしかに十返と同郷で、高松中学の先輩だと聞いていた。

「はい、お噂は十返からよく伺っておりました。とても秀才でいらしたって」

成田さんは高松中学から東大へ進まれ、十返は落第生の今という落ちこぼれで、おまけに中学三年で駈落ちまですたという、その方での、したたか者だったらしい。それでも成田さんのことは同じ中学の先輩として、また自分とはまったく質の違う秀才として、一目も二目も置いていたらしく、テレビの国会ニュースなどに成田さんの顔が写るたびに、「彼は秀才や、オレとは大分違つてな」とニヤニヤしながら私に教えたりしたことがあった。

「あれは、そう、戦争中だったですかねえ。ぼくは十返君と風呂屋で出合いましたね、滝野川の

……」

「ええ、そのお話、十返からも聞いておりました」

「汚い風呂でしてね、湯が、この辺までしかなくてねえ、ぼくは十返君と肩をくつつけるようにして入りましたよ」

成田さんはぼそぼそとした調子でそんな昔話をしながら、長身を折り曲げるようにして、黒っぽいズボンの膝の辺りを手の甲で示し、大きな鼻をしかめて笑っていた。

「じゃあ、どうぞよろしく」

そういつて、私が再び見ることもなくなった後姿を残して、成田さんは人々の群れる中にまぎれて消えた。あれはまだ一年余りほど前のことだったと思うのに。

それは一九七七年七月の参議院選挙を前に、「もう引退させて」と、しきりに出馬を渋る社会党議員の田中寿美子さんを、文字どおりみんなして励まして、もう一度頑張って貰うための、主として女性たちの多い集りであった。成田さんも忙しい時間を割いて、たしか途中から田中さんの応援のために身体を運ばれたのだったと思う。私も旧知の田中さんのために、会の終りの方で一と言簡単な挨拶をしたのだったがその後で、成田さんはどこからか人混みを分けて私を探して下さり、わざわざ声をかけられたのだった。そして当の田中寿美子さんを始め、その会の司会をつとめた樋口恵子さんのことなど、女流の活躍をとても心強く思っているというような意味の言葉を、ちよつとはにかみを見せながら口にされたあと、十返と風呂屋であったという昔話をされたのであった。

そう、滝野川の、あの風呂屋――。

そこで十返が成田さんと出合ったことは、むかし十返から聞いていたとはいえ、その十返が死んで十数年も経った頃、初めて会った成田さんの口から、思いもかけずその風呂屋でのことを聞いたときの印象は不思議なほど鮮烈であった。その言葉はまるで写真の現像液のようにたちまち

のうちに、私の脳裡の白い印画紙の上に、滝野川の焼野原を浮び上らせるのだった。そしてその辺りだけ焼け残っていた風呂屋の、高い煙突がくつきりと目蓋の裏に甦る。

その辺り——今はとうの昔に滝野川から北区に変わっている西ヶ原から上中里へかけての境界は、私が十返と結婚して初めて住んだ、いつてみれば私たちのネガティブのような土地なのである。

そこはちょうど、東京の山手線駒込駅の裏口から、京浜東北線の上中里駅とを結ぶ線上にあつて、たまに思い出すその辺りの遠い風景の中には、なぜかいつもその風呂屋の高い煙突が、くつきりと浮かび上ってくる。ちょうどそこからどちらの駅に歩くにしても、十二、三分の距離だった故かも知れないし、あるいは新婚時代と風呂屋という生活的な場所は、ひととき結びつきやすかったからなのかもしれない。とくに私がそこに住んだ当初は戦後まだ間もない昭和二十一年の秋だったから風呂屋とて毎日営業していたわけではない。姑がチビた下駄の前歯だけをさらに減らすようなせつかちな足つきで、せかせかと表通りまで歩いてゆき、風呂屋の煙突から煙りの出ているのをたしかめてきては、

「けようは風呂屋が開いとるでえ、はよ行きまい、行きまい」

と、不精な息子をせきたてる様子が忘れられずに残っていたからでもあろうか。そして私は姑からすすめられるのをよいことに十返を誘い出し、姑や十返の息子との同居の息苦しさを逃れて、風呂屋までの僅かな道のりにせよ、二人だけで歩く愉しみを貪ったりしたものだった。それが「滝野川の、あの風呂屋」だったのである。

たぶんそんなことが理由だったのだろう。その界限で戦争中を過され、そして十返と一緒に汚い風呂につかったことを伝える成田さんに、そのとき私はひととき身近な親しみを感じたことはたしかだった。それは銀座や新宿の酒場などで、生前の十返と酒を飲んだと伝えられるのとはまるで異なる、何か私たちだけが共有する侘しさ、もの悲しさを伴う親近感なのであった。

成田さんの計を知ったとき、私の古いアルバムから一枚の写真が消えていった——というように淋しさと儚なさを感じたということも、きつとそうしたものの悲しさを、たとえひそかにではあるにせよ、自分と共有する相手を失ってしまったことの嘆きだったのかもしれない。そうしているま、二人とも鬼籍に入ってしまったあとに私の目蓋に浮かぶものは、ゆらゆらと立ちのぼる湯気にかすむ、妙に稚い少年のような二つの裸像なのである。たぶん「あの風呂屋」からのイメージだからなのだろう。

十返が上中里に住んだのは、敗戦の二、三年前からだと聞いていたから、成田さんもその頃「あの風呂屋」のある西ヶ原に住んでいられたのであろう。その風呂屋の南側で方角からいえば駒込駅に向う近くに住んでいた知人から、最近になって、成田さんがその家の庭づたいに風呂屋へかよう姿を何度か見たことがあると聞いた。戦争中は空襲時の避難をしやすくするため、どの家も垣根や塀をとりはずしたりしていたから、きつと成田さんも家々の庭を通り抜けて、その風呂屋へ通われたに違いない。

十返の住いはそことは反対の北側に当り、風呂屋の前の、田端方面へ向う広い通りから上中里駅の方角に、細い路地を入ったところにあつた。けれども彼の一家は敗戦の前年の四月に、その家を友人にまた貸して郷里の高松へ疎開し、そこで焼け出されたあと、戦後ふたたび一家でもとの家に戻って、友人一家とは、二階と階下とに分れた同居生活をしていた。そして十返は私と結婚はしたものの、私のために新居をととのえたりする才覚もなく、母親と息子との三人で暮している六畳と四畳半の二階へ私を迎え入れたのであつた。つまり私の新婚は同居の、また同居だったことになる。いくら敗戦直後の極端な住宅難の折だったとはいえ、これはあまりにもひどすぎたのではないかと、今考えると十返と私の無能、そして無謀ぶりにいささか呆れる思いがするくらいである。

もつともこと衣、食、住に關しての十返の無為無策ぶりは、その後の結婚生活でいやというほど味わわれたのだが、その時点で見抜けなかったことは、やはり私の不覚という他はない。何事も母親まかせで自分は部屋一つ探す氣も持とうとせず、姑は例のせつかな歩き方で、せかsekakaと隣近所を歩きまわり、ようやく近くに六疊一間を見つけたものの、そこも半年足らずで追い出され、けつきよくは六疊、四疊半に姑と継子と暮す上中里の私の生活は丸四年も続いたことになる。

今から思えばよくも辛抱したものだといえそうだが、その当時はよくよくの運のいい人か、ヤミ商売で儲けた人でもない限り、一軒の家に幾世帯も同居する生活は、まあまあ前と違ってよかった。それに私たちの階下で暮していた十返の友人一家にしても、部屋数は私たちより玄關の三疊間だけ多いとはいえ、そこに夫婦と子供二人に奥さんの弟妹を加えた六人が住んでいたのである。二軒一棟となっていたその家の、壁一つ距てた隣りに住む大家も、やはり老若二組の夫婦と、子供たちのひしめく同居生活だった。

もともとその家を友人にまた貸して十返の一家が疎開するとき、どのような約束になっていたのかは知らないのだが、だれもがみな住む家もなく困っていた頃、彼らは疎開さきから舞い戻ってきて、たとえ同居にせよ、もとの住いに帰れたということは、その友人一家がよほど善い人だったからだろう。当時はどちらを向いても同居をめぐって、「出てゆけ、ゆかぬ」のトラブルは日常茶飯ともいえる頃だった。その友人は中江隆介という新劇の役者さんで、私が知った頃は人形劇団ブークの仕事に情熱をもやしていられると聞いていた。やはり十返とは同郷の高松の人でたしか中学も二、三年先輩だったのだろう。あるいは成田知巳さんと同級くらいだったかもしれない。

十返は中江さんをその本名が高田良介ということからか、「りょうさん、りょうさん」と慕い、

狭い家に同居はしていながらも殆ど顔を合わせたこともないわりに、兄貴のような親愛感を抱いていたようだった。彼から聞かされていた高松での中学生時代の友人といえ、あとにもさきにもこの「りょうさん」一人で、もとより成田知巳さんの名を聞いたのは、成田さんが政治家として知られるようになってからのことである。「りょうさん」はもともと新劇俳優を志すほどの人だったから、中学生時代には、かなりな文学青年だったのではないだろうか。十返はこの人と連れだつては週ごとに高松市の映画館へ通い、その映画館のちらしへの投稿メンバーとして巾をきかせていたそうである。文学や映画などとはまるでかかわりのなさそうな料亭の息子に生れた十返が、早くから文学を志したのは、たぶん中江隆介さんの影響が、かなり大きな部分を占めたのではないかと私には想像できるようだ。

その中江隆介さんも他界されてから、すでに十余年の年月が経つ。八月の暑い日、病院の霊安室に眠る「りょうさん」に、私は一輪の花を供えたが、そのとき目蓋によみがえつたのは、隣家もふくめたあの四世帯がひしめく、煤けた古い家だけで、「あの風呂屋」の界限まではひろがつてゆかなかつた。

西ヶ原の坂道

北区の西ヶ原出張所というところに私の本籍が置いてあるので、戸籍抄本などの必要なときは、何度かそこへ足を運んだことがある。近頃は郵便ですますこともあるのだが、その日は近くに訪ねなければならぬ十返の縁者があるので出かけたのだった。訪ねる用むきというのも、十返の郷里にある墓所の管理についてである。どうせ慶びごととは縁の遠い用むきに決っているのだ。

その日に限らず、この場所へくるときはいつも、なぜか私の心は重く、弾まない。理由の定まらない鬱陶しさに運ぶ足も、つい重くひきずるような気分になる。といつても決して不便なところではなく、山手線の駒込駅からバスに乗れば二つ目だし、また歩いてもせいぜい十分そこそこの距離でしかない。その場所は飛鳥山へ向う本郷通りが、古河庭園という、明治の西洋建築と庭園で知られる東京のちよつとした「名所」の前で、田端方面への広い路と二股に分れる角地にあるのだから、むしろ便利な場所でさえある。

それなのに、ここへ足を運ぶのは、なにかひどく億劫なのだ。どうしてなのだろう。

それはだれだって、区役所などへ出かけるのは面倒なことだ。そのくせ、どうしてもそこへ出向かねば市民生活が保証されない。そんな、だれにでもある鬱陶しさもないわけではないけれど、私の場合は、そうした雑事からくる煩わしさによる気の重さとはまたべつな何かがある。たぶんそれは、この辺り一帯が、前にも書いた私の新婚時代を過した土地だということからくるのだろ